

パーニニのサンスクリット文法 と「五十音図」の形成について

鈴木 一郎

はじめに

日本の「五十音図」がサンスクリット（悉曇）の影響を受けている事実は、すでに明らかにされているが、サンスクリットの音韻を分析し、それを組織的な文書の形で大成したパーニニ（Pāṇini, 波憍尼）の研究は日本では遅れているようである。最近ペンシルヴェニア大学のジョージ・カルドナ（George Cardona）が、パーニニに関する龐大な文献目録とその概説 *Pāṇini, a survey of research* (Delhi, 1980, Motilal Banarsidass, The Hague, 1976, Mouton & Co., B. V. Publishers) と、Paniniの著書とその伝統について *Panini: his work and its traditions. Vol. I: Background and introduction* (Delhi, 1988, Motilal Barnarsidass) を公表しているので、それらを参照しながら、古代における中国・日本のサンスクリット（悉曇）^{ソツタン}研究と、「五十音図」の形成を、比較文化の立場から検討して見たい。

サンスクリットと西洋のインド・ゲルマン系言語とのつながりについては、すでに前世紀以来、多くの研究がなされているが、その東方（ビルマ、タイ、クメール、中国、日本）の言語とのつながりについては、仏教用語との関連における梵語の領域に限定されていて、パーニニに遡る研究は遅れているように思われる。Cardonaの研究に、これら東洋各国の研究が附加されることによって、サンスクリットの社会言語学的な検討が、よりグロー

バルな角度からなされることは、大きな将来への課題であろう。

パーニニの生涯に関してはインド西北のシャラートウラ (Śalātura) の生れで、母の名はダークシー (Dāksī) ということしか、わかっていない⁽²⁾。その年代も前5世紀または前4世紀と、諸説があるけれども⁽³⁾、その文法は前3世紀には出来上っていたとみられるから、前5世紀後半から4世紀前半あたり (前400年頃) の人とみてよいであろう。ギリシャでいえばソクラテス、プラトン、アリストテレスの頃にあたる。アリストテレスはアレキサンドロスの教師で、王はバクトリア (大夏)、ソグディアナ (粟特) などを征服 (前328-323)、ついで北西インドに戦め込んでおり、その後セレウコス朝は、インドのマウレア朝のチャンドラグプタ (Chandragupta, ギリシャ名 Sandrocottus) の首都パタリプトラ (現在のガンジス河畔の Patna) に使節メガステネス (イオニア人) を派遣している (前302-291年)。前4世紀のギリシャでは、弁論術や文法学がさかんであったが、同じ頃に、インドでもサンスクリットの文法が形成されているのである。メガステネスの『インド誌』 (Ἰνδικά) は失われたが、後にストラボ (Strabo) やアリアーヌス (Arrianus) が、これをもとに「インド誌」を残しているから、それらを参照しながら、ギリシャの修辞学や文法に関する作品を、パーニニの文法と対比して見ることは、面白い今後の研究課題であろう。

パーニニの作としてつたえられているのは次の4点である。

1. 「文法書」 (Aṣṭādhyāyī, 8巻, 4千の短文からなる。)
2. 「音韻表」 (Akṣarasamānāya)
3. 「動詞の表」 (Dhātupāṭha)
4. 「雑表」 (Gaṇapāṭha)

「文法書」は別名 Śathānuśāsama, すなわち「正しい発声法」を意味する。なぜ、発声や発音が必要であったのか。それを知るには古代インドの抒情詩ヴェーダ (吠陀), 特にリグヴェーダ (Rg-veda) と、それを伝えるブラーフマナ (Brahmana, 婆羅門) に遡らねばならない。彼らは古

代インドの最高の社会階級に属し、梵天の裔と称し、僧侶・司祭であった。その語ることは、一般の「はなしことば」(bhāṣāyam)に対して、「聖典の用語」(chandasi)として、区別され、各地の方言を超えて、統一された共通語である必要があり、かつそれは「美しく洗練されたことば」(saṃskṛtam, saṃskṛtāvāk)でなければならなかった。ヴェーダは同時に宗教的文書でもあったのである。

すでに前6世紀、5世紀以降、ブラーフミ文字やカロシュティ文字が形成されていったが、文字に書かれたものを読むよりも、暗記した朗詠の方が尊ばれていたようで、この語り伝えの伝統は現在でもインドや東南アジアに残っている。

同じ頃ギリシャにも神々の口をかりて、トロヤの詩を吟ずる吟遊詩人達がいる、その詩人達の吟誦コンクールが組織化されている。何人かで長編の「イーリアス」や「オデュッセイア」を語り継ぐ(これを「縫い合わせる」^{ラフトー} *ῥάπτω* といった)のである。「詩」(^{オーデー} *ὕδης* = ode)を「縫い合わせる」者であるから rhapsodoi (*ῥαψῳδοί*, rhapsodyの原型)とよばれた。そんな中で、標準のギリシャ語の発音や、ギリシャ文字が形成されていったのであろう。

すでにパーニニ以前にも、こうしたブラーフマンの吟誦の発声法や、文法(Vyākarma)の師匠(acāriānam)がいたようで、10名の名前が記録⁽⁴⁾されている。パーニニはこれらの先輩の業績を参照しながら、これにインドの北方方言(udicam)や東方方言(prācām)を考慮に入れて、その「文法書」を大成したといわれている。それはしゃべりことば(prākṛta)とは異なる高雅な正しいことば(saṃskṛta)であった。仏教の展開とともにそれは単純化されて行き、同じ語系であるが仏典の用語となっていたのがパーリ語(pāli)である。

前3世紀といえば、かのアレキサンドリアの図書館が設置され、ヘレニズムの文化が地中海世界に拡大されて行く時期であるが、その頃、さきのチャンドラグプタの孫にあたるアショカ王(Aśoka, 阿育王)が、北インドから中部に広がる大帝国を建設し、各地に仏教を広めている。更に仏教

の布教がインド西北部から西域に拡大されるにつれて、西域の仏教用語はサンスクリットとなり、これは完成されたことば (siddham) として中国に導入される。悉曇はこの siddham である。それは西暦紀元以後のことであろう。

一方、インドではマハバーラタ (Mahābhārata) やラーマヤナ (Rāmāyana) のような大きな叙事文学が形成されていく。かくてサンスクリットは、西域からインドにかけての共通公用語 (lingua franca) となっていた。それはヘレニズム期のギリシャ語や、帝制ローマのラテン語の役割と対比できるであろう。

かくてサンスクリットは、パーニニ以後、その伝統を継ぐ者達の手で更に完成された形となる。後2世紀にはアシュヴァゴーサ (Āśvaghoṣa) が文語体のサンスクリットを仏教用語として確立したが、究局的には、5世紀の詩人カーリダーサ (Kālidāsa)⁽⁵⁾ がサンスクリット文学の最盛期をもたらした。彼は戯曲3点、叙事詩2点、抒情詩などかなりの量の作品をのこしている。その代表的戯曲 Sakuntalā は現在各国語に訳されている。カーリダーサは約8世紀程前のパーニニのサンスクリットを大成した人物とみなされている。その手によってサンスクリット文学はまさに「完成された」(Siddham) といえるであろう。そしてこれを中国にもたらすのは法顕(5世紀)、玄奘、義浄(7世紀)であった。悉曇学が中国に定着するのは5世紀から7世紀にかけてのことであろう。

中国における悉曇研究の展開

中国における仏典漢訳事業は、後第1世紀頃開始されたといわれるが、実績を挙げるのは2, 3世紀以降で、当初は西域から入った外国人僧侶が訳業に従事したらしい。その後、記録されているだけでも、朱士行(3世紀中葉)、法顕(399-413年訪印)、玄奘(629-645年訪印)、義浄(671-695年訪印)などの中国僧がインドを訪ね、梵語原典を持ち帰っている⁽⁶⁾。

また、一方ではクマラジーヴァ(羅什, 344-413年父インド人、龜兹国^龜生れ。401年長安に入る)、パラマルタ(真諦, 500-569年、西イ

ンドの人、548年南京に入る)、プニョーダヤ(福生、那提三蔵、インド中部出身、655-663年の間訪中)などのインド系の僧侶も中国を訪れ、仏典の訳業に参加している。

表音文字から表意文字への翻訳

さきに述べたように、三国・六朝時代(3世紀から6世紀まで)に仏典の翻訳が⁽⁷⁾発展するにつれて、他言語と漢語の差が浮き彫りにされ、漢語特有の字の構成(声母+韻母からなる)や声調が意識されるようになる。元来、表音文字であるインドの文献は、パーニニ以来の発音の統一がなされた上の表記であるから、悉曇文字の発音については、問題はなかったであろうが、それを表意文字である漢字におくことが、如何に困難な作業であったかは、想像に難くない。特に retroflex(反転音。prettyのrのように舌先を上を反転させて発音するインド特有のɽの音)などは漢音にないのである。

しかしまず、梵語の原典を理解することからはじめなければならない。これは悉曇学とよばれ、4、5世紀頃には『悉曇字記』18章が書かれ、7世紀には初唐の僧、智広によって悉曇文字が大成され、その字体は日本に伝えられ、それは現在も卒塔婆に用いられている。

しかし、問題は梵語の発音、たとえば siddham を「悉曇」とするように、翻訳(translate)ではなく、音訳(transliterate)する場合に、数多くある漢字の中から、どれを選ぶかであった。しかもそれらの漢字の発音は各地それぞれ異なる上に、漢字には音素文字がないから、時代を経るにつれて発音も変化する。それは現在日本で使われている漢字の発音(訓でなく音に限って)にも、古音、呉音、漢音などがあることから想像できるであろう。中国では漢の頃に、それまでの隷書などの書体が、標準の書体、楷書に改められ、現在の漢字となり、また紙が発明されて、それまでの木簡、竹帛の文書が楷書体の文書に書きなおされている。このようにして文字の統一は出来上がるが、一方、その発音に関しては、統一が甚しく困難であった。後98年頃、後漢の許慎は隷書と楷書の対照字典『説文解字』をつ

くり、漢字を象形、指事、会意、形声、転注、仮借の6種に分類しているが、これは語源字典とでもいうべきものであって、発音や音韻にはふれていない。更に魏の書家、鍾繇（後151-230年）は楷書の標準の書き方のモデルを残し、更に東晋の書家、王羲之（321-379年）の手になる現在書道につかわれている字形を、梁の武帝の時（521年）、周興嗣が韻文に配列し、現在使われている「三体千字文」が完成されているが、これは文字を学ぶための calligraphy であって、発音とは関係ない。

そこで、まず、悉曇の源流であるパーニニの音韻論とその伝統を考え、ついで中国の音韻論の中心となる「反切法」とその伝統を考えてみることにしたい。

パーニニの音韻論とその伝統

パーニニの音韻論を検討してみると2つの点で、大きな特徴があることを知る。

第1は、全体が至極合理的、組織的に作成されている点である。

第2に、その母音や子音の配列が日本の「五十音図」の配列に影響を与えているとみられる点である。

パーニニは口腔 (oral cavity) を *tulyāsyaprayatnam* と呼び、これを通過する呼吸をとめる機能、つまり、舌と喉や口蓋、歯、両唇を *sparśa* (stop) と名付けている。その接触の度合を次の3つに分ける。

- (1) 完全接触 (*spr̥ṣṭa*) …………… 子音 (*yañjana* = 体文)
- (2) 不完全接触 (*tsatspr̥ṣṭa*) …………… 半母音 (*antahsthā*)
- (3) 完全分離 (*vivāra*) …………… 母音 (*svara, matr* 摩多)

ついで母音を口腔の奥から前方に配列する。

(1) 単純母音

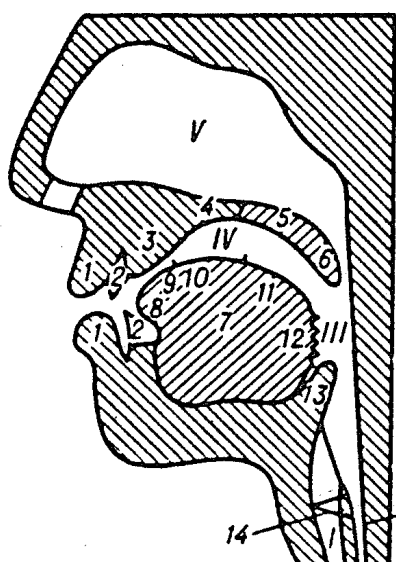
- 喉 (軟口蓋) 全開 (*kaṇṭhya* = velar, post-palatal) …… a, ā (あ)
- 口蓋 (齶) に舌中部を近ずける (palatal) …………… i, ī (い)
- 両唇を丸くする (labial) …………… u, ū (う)

(2) 二重母音 (diphthong)

- 口を横に広げ、舌中部をあげる (palatal) e, ai(え)
 口を極端にすぼめる (labial) o, au(お)
- (3) 半母音 (semi- vowels)
- 口蓋に舌中部を寄せる (palatal) ya (や)
 舌先を上方にまるめ、口蓋に寄せる (retroflex) ra } (ら)
 舌先を上歯の裏につける (dental) la }
 両唇をすぼめる (labial) va (わ)

口腔の発声機能

(W. Morgenroth : *Lehrbuch des Sanskrit*, 1977. S. 25 参照)



- | | |
|------------------|-------------------|
| I 気管 | 6. 懸壅垂 (Uvula) |
| II 食道 | 7. 舌 (Lingua) |
| III 咽頭 (Pharynx) | 8. 舌端 |
| IV 口腔 | 9. 舌平坦部 |
| V 鼻腔 | 10. 舌前部 |
| 1. 唇 (Ladia) | 11. 舌後部 |
| 2. 歯 (Dentes) | 12. 舌根 |
| 3. 歯経 (Alveolen) | 13. 会厭軟骨 (Larynx) |
| 4. 硬口蓋 (Palatum) | 14. 喉頭と声帯 (Voces) |
| 5. 軟口蓋 (Velum) | |

全体として発音の位置が、口腔の奥から前方に配列され、舌の位置は⑪から順に前方に⑧まで、口蓋の位置は⑥から③、更に上下の唇の①までが配され、後方から前方に発音の位置が移動していることがわかる。

上の配列の(1)と(2)を短音、長音の区別を無視して、日本語にあてはめてみると、アイウエオ順になる。(二重母音の ai はギリシャ語の *αι*, ラテン語の *ae* につながり、au は現在フランス語の *au* (オ) の音になっている。)

同じことは子音の配列にも見受けられる。

Varga (類)	Sparsa (ストップ) の位置		清音		濁音 (有声音)		
			無気音	気音	無気音	気音	鼻音
カ行 Ka- Kakara-	(軟口蓋) 舌後部	(喉) Jihvāmūlīya (Velar, Post-palatal)	[ka]	kha	ga	gha	ṅa (ンガ)
チャ Ca- 行 Cakara-	(口蓋) 舌中部	(齶) Tālavya (Palatal)	[ca]	cha	ja	jha	ñā (ニヤ)
タ行 Ta- Takara-	舌先反転 歯後部	(斷) Mūrdhanya (Retroflex)	ṭa	ṭha	ḍa	ḍha	ṇa
タ行 Ta- Takara-	舌先 歯後部	(齒) Dantya (Dental)	[ta]	tha	da	dha	[na] ナ
パ行 Pa- Pakara-	上下唇	(唇) Osthya (Labial)	[pa]	pha	ba	bha	[ma] マ

同じく口腔の奥から前方に向って発音の位置が配列されている。そして各行(数)が、清音(無声音)と濁音(有声音)、無気音と有気音、鼻音に分類されている。

この表の中から ka, ca (チャ), ṭa, ta, pa の中、日本語にない ṭa (retroflex) を除けば、ka, ca, ta, pa となる。更に ca 行を sibilant の S 音の sa に変え、pa 行を ha 行におきかえ、これに ta 行の na と、pa 行の ma の 2 つの鼻音を加えれば、ka, sa, ta, na, ha, ma の順になり、これに母音の a を頭につけると、五十音表のア、カ、サ、タ、ナ、ハ、マまでが出来上る。更にその後には先の半母音の ya, ṛa, ḷa, va の中の ṛa, ḷa を一つにまとめ、ラとすれば、ヤラワとなり、アカサタナハマヤラワの順になる。

更にパーニニは歯擦音 (sibilant) を śa, ṣa, sa にわけているが、この sa だけが、ca 行に編入されたと考えればよい。チ音は ca 行の名残りであろう。

このサンスクリットが中国に入って悉曇とよばれるのは上述の『悉曇字記』であるが、それはさきのカーリダーサがインドで活躍していた古典期

のサンスクリットの完成期にあたる。そして、その頃インドを法顕や玄奘が訪ねていたことになる。そして唐僧、智広が悉曇文字の筆による書体を完成していることは、すでにパーニニ以来のサンスクリット研究が、中国（初唐）には完全な形で導入されていたことを物語っている。

日本からは、元興寺の道昭（25才）が、653年入唐し、玄奘（602－664年）に師事し、起居をともにしたという。玄奘がインドから帰るのは645年で、道昭が入唐した時にはすでに52才であった。数年遅れて観音寺の智通、智達らも長安に入り、玄奘の教えをうけている。当時玄奘は、インドからもたらした龐大な量の梵語の經典の翻訳にあたっていたから、これらの留学生達が、その訳業に接しなかった筈はない。

しかしかれらの帰国後の日本は、大化の改新の後、白村江で唐軍に敗れ、国内では壬申の乱が起るなど、不安定な政情下であり、悉曇学にまで遡って、仏典の研究をなすような雰囲気ではなかった。

奈良朝に入り、中国に滞在していた南インドの僧菩提遷那(Bodhisena)や林邑（今のベトナム）僧、仏哲が、736年来日している。740年頃、各地に国分寺がつくられ、經典が送られている。753年には唐の高僧、鑑真を迎え、翌年建立された大仏の開眼供養が行なわれ、更にその翌年、東大寺に戒壇が設けられ、僧尼に戒律を授けることが可能になった。その際、「百万塔」がつくられ、百万基の木製の小塔の中に「陀羅尼經」一卷（4種類あった）が納められて、奈良諸大寺に送られている。この「陀羅尼經」は梵語をそのまま漢音にあてはめたもので、梵文の呪文として訳出せず、そのまま読誦したという（下表はその例である）。

om a-mo-gha vai-ro-ca-na ma-hā mu-d-ra ma-ṇi pa-d-ma 唵 旃 慕 伽 廢 魯 者 娜 摩 訶 畝 陀 羅 摩 拏 鉢 頭 麼

j-va la p-ra-vart-ta-ya hūṃ 人 縛 擢 跋 羅 鞞 譚 野 吽

法隆寺に残っている悉曇文字の古貝葉は天平年間（729－749年）に南

インドから伝わったというから、菩提遷那の来日と時期が重なっている。彼も南インド僧であった。また悪名高い道鏡（－772年）も、梵文に通じていて、菩提遷那や義淵（－728年）から梵文を習ったというから、これらを総合すると道昭の入唐（653年）から、奈良朝末まで、約100年以上の間に、悉曇学が日本に入って来ていなかった筈はない。しかし、この時期には、まだ仮名文学はできておらず、外国語である漢字を万葉仮名として使っていたのであるから、悉曇の学習も口伝えになされていたのであろう。本格的な音韻学の研究は空海、最澄、更に円仁を待たねばならない。しかし、サンスクリットの音韻研究とともに、もう一つ問題があった。それは漢字の音韻である。

呉音と漢音

広大な中国では、文字の統一はできても、その発音は各地域でそれぞれ異り、現在でもはなしことばは、北京と上海、広東では互いに理解しにくい状態である。しかも音素文字にあたるものがないから、同じ地域でも時代によって発音が変化する。

すでに後漢のしょう応邵が、漢語の反切法を考案したといわれている。

反切とは漢字2文字を使い、上の字（父字、頭子音）の頭の子音（例えば「徳」= takのt）と、下の字（母字、韻母、韻）の頭の子音を省いたもの（例えば「紅」= hugのug）を合せて、第三の文字（例えば「東」= tug）の発音を定めるという面倒な方法であった。

これは更に六朝末の陳（560－583）の陸徳明の『經典釈文』や、隋（581－619）の陸法言の『切韻』（601年）に大成され、漢字を平・上・去・入の四声併せて93韻に分けている。更に唐代には王仁昉が『刊謬補欠切韻』を完成した。その頃、玄奘は梵語のr（retroflex）を漢字に移すのに腐心しているが、彼に協力した玄応は音韻学に通じていて、『玄応音義』を残し、また慧琳（784－807）は『一切経音義』を書いている。

これらは唐末に守温の手でその『悉曇学』の中にまとめられ、漢字の音韻学の基礎が形造られている。このことは、中国の音韻学が悉曇学との関

係で成立していることをうかがわせる。空海、最澄、円仁が唐に赴いたのは、まさにこの中国の音韻学と悉曇学が、その頂点に達した時期であったといえよう。

以後、晩唐の政治は下降の一路を辿り、それは円仁の遣唐船が最後の公的遣使船であったことから理解できよう。

さて、日本に仏典が入ったのは第6世紀前半といわれているが、その頃導入された発音は揚子江南方（三国時代の呉）の呉音であった。それは仏教渡来の頃の日本における漢字の標準の発音であったようで、以後、奈良朝に至るまで、漢訳仏典は呉音で朗読されており、その伝統はその後も現在にまで及んでいる。また律令の文章も呉音で読まれていた。

遣唐使の派遣とともに、唐の首都長安を訪れる日本人達は、その発音が全く異なることに気付き、日本での漢字の読み方を呉音から漢音に切替えようとしている。

720年の詔は、僧尼の発音の乱れを、唐僧、道栄や学僧勝暁などの指導で修正させようとしている。しかし、すでに定着した呉音を変更するのは困難を極めたようである。それは当時、漢音は「正音」呉音は「和音」とよばれていたことから理解できる。

平安朝に入り、延暦11年（792年）、漢音奨励の勅がでており、更に翌年、学僧（年分度者）は漢音を修得しなければ、正式の僧として得度せしめない方式が打出され、5年後の798年には呉音禁止令まで発布され、仏教界以外にもこれは適用されることとなった。

しかし、すでに長い年月にわたり、呉音は万葉仮名の中にも定着していたし、読経もその伝承に従っていた上に、明法道（法律学）の用語も、呉音であったから、これを完全に漢音に切替えることは不可能に近かった。

延暦23年（804年）になると、漢音に限定する必要なしとする寛和令勅がでている。

この呉音か漢音かの区別を示すために作られるのが、漢字を略した形の片仮名であった。それは漢文の文章に「訓」や「註」の形で書き込まれて

いったのである。そして正しい発音を示す方式としては、さきの「反切」が用いられている。つまり仮名は当初漢字の発音を示す音素文字的な役割をもっていたといえよう。

平安朝における悉曇学の展開

804年空海とともに入唐し、翌年帰国した天台宗の開祖、最澄（767－822年）は比叡山延暦寺を開き、大衆戒壇の建立をめぐる、南都諸宗と対立し、814年には宮中の清涼殿で南都の法相宗の僧、徳一と宗論を行なっている（「三一権実の論諍」）。このことは教義論争が公式の場所で行なわれる程に、仏教教義の研究が進展していることを示している。この戒壇設立によって、比叡山は東大寺の戒壇から独立して、天台の僧侶を任命できることとなるのである。

以後、天台宗と延暦寺は次々僧を唐に送り、その中から円仁や円珍のように、梵語を学んで帰国する僧がでてくる。

その頃の中国では、すでに一世紀前に義浄（635－713）が海路インドに渡り（671－695）、梵文経典400余部をもたらし、洛陽に帰り、華嚴経金光経、律部など56部230余巻を漢訳していた。義浄はその旅行記の他に、『大唐西域求法高僧伝』を公にしている。空海や最澄が、短期間ではあったが、その留学中にこうした中国僧の翻訳事業に大きな感動を覚えて帰国したことは疑いない。空海は唐の釈智広の『悉曇字記』を持帰っている。また最澄の弟子、円仁（794－864）も838年入唐し、9年間中国に滞在している。

興味深いのは円仁が、その日記『入唐求法巡礼行記』の中に、悉曇字母を列記していることである。それには母音が、パーニニ以来の a, ā, i, ī, u, ū, e, ai, o, au, am, aḥ に ari, arī, li, lī が附加されている。また『悉曇字記』には体文（子音 + a）35が誌されているが、これもパーニニの ka, ca (チャ), ṭa, ta, pa の順になっていて、その後 ya, ra, la, va, śa, sa, ṣa, ha, llaṃ, kṣa が付け加えられている。その表の中から、さきのパーニニの場合と同様、古代日本語の音を拾って

行くと、カ、チャ、タ、ナ、パ、マ、ヤ、ラ、ヴァ（ワ）の順になる。

更に円仁の弟子、円珍（814－891）も、5年間唐に学んでいるが、もう遣唐使船は廃止されていたから、貿易船を利用して入唐した。

かくて9世紀は、天台宗の拠点、比叡山延暦寺を中心とする梵語、悉曇学の最盛期であったといえよう。それは中世のラテン語の伝統の中から、更に聖書をギリシャ語やヘブライ語の原典にまで遡って、文献学的に検討しようとしたエラスムスなど一連の16世紀の人文主義の流れと比較することができるであろう。

しかし、中国では9世紀末（907年）には唐が滅亡し、梵語の研究は下降を辿っている。

10世紀後半に入って宋の太宗の時（982年）、開封の太平興国寺に3人のインド僧（天息、施護、法天－インド名不詳）が迎えられて、訳経院が設置され、翻訳が行なわれている。同院には印刷所まで作られ、国家が訳者助手を任命し、更に将来インド人の立去った後のために中国人の少年10名に梵語を学習させる制度を設けている。1,036年には50人の少年が梵語を学んでいた。しかし、1119年には太平興国寺は廃止され、訳経や後継者の養成は中止された。以後、中国では長い年月の間に、あれ程の努力をしてインドから輸入した梵文原典は跡形もなく消失してしまった。

興味深いのは、この宋代に四川省の成都で13万枚の版本が完成され（971／2－983）、北宋版（蜀版）といわれる「大藏経」が印刷されていて、この印刷本一揃を宋に留学した日本人僧ちようねん裔然（1016年日本で没）が986年に日本に持ち帰っている点である（5,048巻中、2巻現存）。中国僧が、困難を排してインドを訪ねたように、平安朝の日本の僧侶も法を求めて、中国に行っているのである。そしてこの時期に、日本語そのものへの音韻学的な研究がはじまり、11世紀頃までに仮名と五十音図が形成されて行く。

仮名文字の成立

五十音図の成立を考える前に、仮名文字がどのようにして成立していっ

たかを考えてみたい。その検討には、文書が聖典として使用されていた仏経関係の經典に附記されている訓点を中心となるのは止む得ないであろう。經典は一般に長期間保存されているからである。これを築島裕氏が、古い例から拾い集めて、訓点や古訓に使用された文字をアイウエオの順に並べた表を作っておられるので、これを参照しながら、仮名文字成立の跡を辿って見よう。⁽⁹⁾ただし、資料が仏典中心（少しの例外はあるが）であり、それらは男性中心に書かれたものであって、平安中期の女流文学者はむしろ草書体の万葉仮名や、仮名を使用していたと考えられる。例がアイウエオ順であるのは、便宜上築島氏が配列されただけで、五十音図の成立とは関係ない。

平安期の仮名文字の定形化

	使用されている文字中 現代使われている字体	全使用字体に 対する割合	所蔵先, 原典名
c.810	うクツニトぬやり (他は 万葉仮名)	$\frac{8}{97}$ 8.2%	聖語藏「阿毗達 磨雜集論」 (古点)
c.830	アらチツとナニヌノは フヘミムモラリ	$\frac{17}{107}$ 15.9%	「弥勒上生経贊」 朱点
883	アうえおかくケコこし タてとトニヌネのハは フヘミムメもエヨリル るレロゐ	$\frac{36}{75}$ 46.6%	聖語藏, 東大寺 図書館藏「地藏 +輪経」(古点)
948	アイウおオかきクこサ しせソタチツてトねネ ハヒふへまミムメやエ らりるルレろわぬ	$\frac{38}{90}$ 42.2%	上野涼一氏藏 「漢書場雄氏」 (古点)
949	アイオカクこしせソタ チツトナニハフヘミム メヨらりルレろ	$\frac{27}{48}$ 56.2%	東京教育大学藏 「金剛頂経瑜伽 脩習毗盧遮那三 摩地法」(加點)
1020	アイウエオカクコこし ソタチツテトナニヌネ ノハヒフヘミムメもや ヨラリルレ	$\frac{35}{55}$ 63.6%	石山寺藏 「成唯識論」 (加點)

1073	ア あ イ い ウ エ オ お カ キ ク ケ コ こ し せ ソ タ チ ツ テ ト ナ ニ ヌ ネ ノ ハ ヒ ひ フ ふ ヘ ホ ム メ モ や ヨ ラ ら リ ル レ ロ ろ る ヲ	$\frac{48}{75}$	64%	防府毛利報公会 東北大学，大東 急記念文庫 「史記」(加点)
1126	ア イ ウ エ オ カ ク コ サ し ス セ ソ チ ツ テ ト ナ ニ ヌ ノ ハ ヒ フ ヘ ミ ム メ モ ヤ ヨ ラ リ ル レ ロ ワ ヲ	$\frac{38}{53}$	71.6%	法隆寺，国立国 会図書館 「大慈恩寺三藏 法師伝」(加点)
1151	ア イ ウ エ オ カ キ ク コ サ し ス セ ソ タ チ ツ テ ト ナ ニ ヌ ノ ハ ヒ フ ヘ ミ ム メ モ ヤ ヨ ラ リ ル レ ロ エ ヲ	$\frac{30}{61}$	49%	日光天海藏「大 日経疏」(加点)
1196	ア イ ウ う エ お カ キ き ク く ケ け コ こ サ し ス す せ セ ソ タ チ ツ テ て ト て ナ ニ ヌ ノ の ハ は ヒ フ ヘ ホ ミ ム メ モ も ヤ や ヲ り ル る レ れ ロ ヲ ん	$\frac{59}{62}$	95.1%	高山寺藏 「夢記」(書写)

この表は、ただ古訓の中から、現在使用されている仮名文字を拾っただけで、五十音図とは関係ない。つまり五十音図が形成される前に、古訓の形で仮名文字が出来上っていったことを示している。

すでに平安初期には、万葉仮名をくずした形の草書体が使われていて、『竹取物語』などはこれで書かれていたのであろう。

表の百分比を検討してみると、平安四百年の間に、次第に仮名文字が今の形になっていったことが、よく理解できる。1151年の『大日経疏』は、49%の数字を示しているが、残りの31文字も、すでに漢字や万葉仮名ではなく、簡単な記号化した特殊字体になっている。

万葉仮名をくずした草書体の字体を草仮名というが、小野道風(894-966)の和歌48首をのせた『秋萩帖』はこれで書かれていた。しかし同じ頃(934年)、紀貫之はすでに『土佐日記』を女性に仮託した仮名まじり文で書いている。女性が書いた形にしたのは、男は漢字(真名)あるいは万葉仮名(真仮名、男仮名)で文章を書いたのに対して、仮名文字は女性のもものとされていたからである。

ドナルド・キーンは当時のヨーロッパにおけるラテン語と、日本の漢字の役割を対比して、ともに聖典や法律、条約などの公的文書に使用されており、男にはこの公用共通語を用いることが義務づけられていたが、「しゃべりことば」でないラテン語や漢字で、詩まで作らせられたのであるから、結局、中世のヨーロッパでは古代ローマのヴェルギリウスや、ホラティウスを真似する形になり、日本でも陶周明、李白、杜甫など中国の詩を参考にしながら漢詩を作らざるを得なかったのではないか、そして、日本の場合、本来の人の心の喜びや悲しみを表現する文学や詩は、漢詩や漢文では完全に表現できず、結局、女性の方が仮名を自由につかって「日記」や「物語」を書くことができたのであろうと説明している。

平安中期の女流文学の字体は漢字と草仮名、平仮名の混交体であった。それまで漢字の楷書体、行書体、草書体の習字の手本『三体千字文』が、周興嗣の手で韻文に配列され、「天地玄黄」に始まる一千の漢字はすでに日本でも使用されていたが、万葉仮名や仮名文字が用いられるようになると、これを学ぶための手習いの手本がつくられ、平安初期には仮名48字を重複しないで詩の形にした「あめつちのうた」「たるにの歌」「いろは歌」などの手習い歌が考案され用いられている。「あめつちのうた」は千字文の「天地玄黄」に頭をあわせている。

(1) あめつちのうた

あめ 天	つち 地	ほし 星	そら 空	やま 山	かは 川	みね 峰	たに 谷	くも 雲
きり 霧	むろ 室	こけ 苔	ひと 人	いぬ 犬	うへ 上	すゑ 末	ゆわ 硫黄	さる 猿
おふせよ 生ふせよ	えの江を 榎の枝を		なれゐて 馴れ居て					

五十音図にあてはめてみると、や行のe、わ行のuが欠けている。や行のeはyeと発音されていたらしく、江の字を当てている。

ついで「たるにの歌」では仮名47字が7.5調の形になっている。二字づつを2つ合わせると4字になるのも「千字文」になぞらえているからであ

ろう。

(2) たるにの歌

大為爾伊天	奈徒武和礼遠會	支美女須土
田居に出で	菜摘むわれをぞ	君召すと

安佐利於比由久	世末之呂乃	宇知恵倍留
あさり追ひゆく	山城の	打ち酔へる

古良	毛波保世与	衣不襴加計奴
児ら	藻葉乾せよ	得船繫けぬ

や行の i と、わ行の u がない。この歌は源藤憲の「口遊^{くちずさみ}」にあるが、「あめつちのうた」と「いろは歌」の中間頃の作とみられている。

(3) いろはうた (伊呂波歌)

これは弘法の作と信じられていたが、現在はその死後、平安中期につくられたものとみなされている。これは涅槃経第13聖行品の偈^げ、「諸行無常，是生滅法，生滅滅已，寂滅為楽」を和訳したものである。

色は匂へど 散りぬるを 我が世誰ぞ
 常ならむ 有^う為^ゐの奥山 今日越えて
 浅き夢見じ 酔^よひもせず

同じくや行の i, e, わ行の u がない。

これは前2者に比し、全体が7,5調に形造られていて、内容もよくまとまっているので、以後、西洋のA, B, Cと同様、習字の手本となり、更に物の順序を示す数詞の代りに使われている。

しかし、これらの手習い用、乃至、習字（文字の習得）用の手習い歌は、暗記には便利であるが、音韻学的な配列にはなっていなかった。これが、五十音図の形にまとめられて行くのは、西暦千年以降のことであろう。その変化を現存する資料から拾って見ると次のようになる。

五十音図の形成

年代(西暦)	段	行	
c.1000	イオアエウ	カサタヤマ ^ハ ラ ^ワ	醍醐寺本『孔雀経音義』
1079	アイウエオ	バダガザ(濁音) ラワヤアマナ(清音) ハタカサ(濁音にも使用) ラナマアワヤ(清音のみ)	大東急記念文庫 「金光明最勝王経」
1095	アイウエオ	アカヤ(喉内音) サタナラ(舌内音) ハマワ(唇内音) アカサタナハマヤラマ アカサタナラハマワ	神尾本 『反音作法』(明覚著) 明覚『梵字形音義』 明覚『悉曇要訣』
1172以後	アイウエオ	アカサタナハマヤラマ	醍醐寺本『密宗肝要抄』 (僧宗命撰)
“ ”	アイウエオ	アカサタナハマヤラワ	華藏院寛智『悉曇要集記』 の追記
1166	アイウエヲ (オとヲの 区別なし)	アカサタナハマヤラワ	興福寺兼朝『悉曇反音略 釈』

上の表からいえることは、段がアイウエオの順になるのは、1072年以降であり、行がアカサタナハマヤラワの順になるのは12世紀中頃であることがわかる。そしてそれを大成させたのは、天台僧明覚であろう。

明覚は『悉曇要訣』、『梵字形音義』、『悉曇大底』などの著者であり、『反音作法』などの音韻学の著書もあるから、パーニニの伝統を継ぐ悉曇学と、中国の反切法によって、ここに五十音図の形にまとめたのであろう。アカヤ サタナラ ハマワの並べ方は、口腔を奥の方から喉内音、舌内音、唇内音に分けている点、音韻学的である。

上の明覚『反音作法』は1095年(嘉保2年)となっているから、他の悉曇関係の文書もその前後の作であろう。前述のように、この頃の中国は宋代に入っており、982年から1119年まで、大規模の經典の訳業が行なわれ、翻訳者の養成が行なわれ、東大寺の学僧、裔然(-1016)は983年(永観1年)入宋し、北宋版「大藏経」を持ち帰っている。明覚の頃に

はまだ太平興国寺の訳経院は存続していた筈である。奮然は五台山を巡礼しているが、こうした国家的な規模の訳経事業と悉曇学習に接したのではあるまいか。そしてそうした宋の訳経院の翻訳事業と悉曇研究が日本に影響を与えて、明覚や、その後の宋命や覚智、兼朝の悉曇研究となったように思われる。そして五十音図は明らかに唐の釈智広の「悉曇字記」などの影響を受けており、それは更に遡れば、西暦前4世紀のパーニニの文法書からでてきていることになる。

古代インドの音韻学が、中国の悉曇学や反切法の研究を経て、はるか日本にもたらされ、それが日本語の音韻の組織化を助けていることは、文化史の観点から見て興味深い。

注

- (1) 築島裕『国語の歴史』東大出版会、1977年、68頁以下参照。
- (2) G. Cardona: *Pāṇini, His Work and Its Traditions, Vol. I Background and Introduction*, pp 2-3
- (3) Michael Coulson: *Sanskrit*. xvii.
G. Cardona: Op. Cit. p.2
G. Feuerstein: *Textbook of Yoga*, London, 1975, Rider, p.36
- (4) Āpiśali, Kāsyapa, Gāngya, Gālava, Cākradvāja, Bhāradvaja, Śakatāyana, Śākalya, Senaka, Sphotāyana—G. Cardona: Op. Cit. p.1.
- (5) その生没年は不詳。前4世紀、5世紀、6世紀など諸説ある。
また同名のKalidasaが他に何人かいたとする説もある。*Encyclopaedia Britannica: Kālidasa*
- (6) 義浄の『大唐西域求法高僧伝』にはインドや南海に赴いた60名の中国僧の略伝がのっている。
- (7) 374年に道安が『綜理衆経目録』をつくり、翻訳者の年代順に訳経を登録したといわれるが現存しない。
- (8) 渡辺照宏『お経の話』1981, 岩波新書, p.65

(9) 註(1)参照。

(10) Donald Keene: *Approach to Japanese Culture*, 1981. pp. 28-29.

Panini's Sanskrit Grammar and its Influence in
the Study of Siddham and Japanese Syllabary

Ichiro Suzuki

An Indian grammarian of the fourth century B.C., Panini, is known as the founder of Sanskrit grammar and phonetics. His systematic phonetic scale entered China in the early Christian centuries and created a school of Siddham. It was then brought into Japan after the seventh century. Japanese intellectuals, especially Buddhist priests, had great difficulty in understanding the imported Sanskrit sutras as they were interpreted by the Chinese translators.

In addition to the multiple ways of pronouncing Chinese characters (some of which still survive in Japan as Go-on and Kan-on), the complicated Chinese letters, which had been specially manufactured for the transliteration of the Indian language of Buddhism, discouraged them, but in the early Heian period (the 9th century) several learned priests, inspired by philological interests, began the study of Siddham employing the Chinese method of analyzing phonetically Chinese characters (*hansetsu*). It was those Buddhist scholars who paved the way for the creation of Japanese letters called *kana* , which were gradually organized into the Japanese syllabary of *Goju-on-zu* (literally chart of the 50 sounds) by incorporating the grammar and phonetics of Panini delivered via China.

This article is a summary of how the old Indian phonetics travelled through China and were integrated in the linguistic system of Japan.